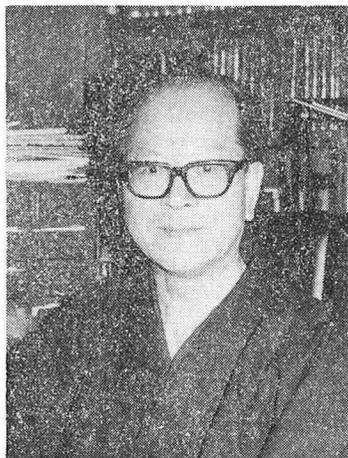


本会顧問 小野川秀美博士計



本会顧問、小野川秀美博士は、かねて病氣療養中のごとろ、一九八〇年七月二十日未明、京都市東山区の京都専売病院にて食道癌のため急逝された。享年七十歳。葬儀は同月二十二日、左京区黒谷の顕岑院で行われた。法名は浄光院学誉秀美居士。喪主は二男勝氏。以下に葬儀委員長島田虔次氏の弔辞を抄録して哀悼の意を捧げる。

私はここに、故小野川秀美先生の御経歴と御業績の概要を御紹介して、追悼のよすがといたしたいと存じます。先生は明治四十二年八月廿一日、高知県安芸郡芸西村にしぶ西分

にお生れになりました。昭和四年高知高等学校文科乙類を御卒業、直ちに京都帝国大学文学部史学科に進んで、昭和八年にそれをおえられました。それから引きつづき大学院に御残りになります。傍ら東方文化研究所の嘱託として、羽田亨博士の指導のもとに、のちに『金史語彙集成』全三冊に結実する御仕事を完成せられました。

ついで先生は昭和十五年一二月、小島祐馬博士を所長として新たに設立された京都帝国大学人文科学研究所の助手に任命せられますが、以後は退官までずっと、人文研を離れられたことはありません。昭和二十六年に助教、やがて教授、そして四八年に停年退官、という次第でございます。退官以後は奈良大学の教壇に立たれまして、此も今年三月停年退職せられるまで、教育に従事なさいました。そのほか、ほぼ二十年の長きにわたって、立命館大学の非常勤講師をおつとめになったことも忘れることはできません。(中略)

先生の学問の分野は、はっきりと前後二つに分かつことができます。第一はいわゆる塞外研究で、大学卒業以後七八年間はこの方面の研究に没頭せられました。今日でも常に言及される「突厥碑文訳注」や「鉄勒の一考察」のほか、五、六篇の論文、及び前述の『金史語彙集成』はこの時期の所産であり、それぞれ学界において高い評価を受けたものであります。このように先生は当時京都大学において輩出しつつあった塞外研究の俊秀の一人として先づスタート

せられたのでありますが、人文研に入られるとともにその方向を一変せられ、以後、中国近代史の専門家として知られるようになるのであります。此は一見唐突に見えるかも知れませんが、必ずしもそうでないと思います。先生はかつて私に、自分は早くから思想史に興味をもち、卒業論文のテーマに一旦は韓非子をえらんだ。ところが主任教授の矢野仁一先生がどうしても賛成されなかつたので、やむなくそのテーマを放棄した、と語られたことがあります。これは私の推測でありませんが、先生が大学卒業を一年間延期していられるのは、あるいはそんな点にも理由があつたのではありますまいか。近代史は今でこそ隆盛をきわめていますが、当時においては殆どいへべき学問的蓄積の見られなかつた分野であり、先生が近代をえらばれたのは、矢野博士のほかに、先生が最も尊敬せられた小島博士の影響ではないかと察せられます。

先生の中国近代史研究の論文は殆どすべて『清末政治思想研究』（昭和三五年東洋史研究会刊、のち、みすず書房より増補版）に収められています。これは先生の学位論文です。今日でこそ中国近代思想史の最高傑作として本書の価値を疑うものは誰もいませんが、出版当時は、争つて読まれた割には不満の声も少なくなつたのであります。それは、当時の風潮たるマルクス・レーニン・毛沢東よりの引用が一語もなく、いわゆる社会科学用語による「分

析」も全然見られないような、そういう中国研究書というものは「科学的でない」と見なす風があつたからです。しかし乍ら、学術的著作の第一の要件はライイアブルであることであり、歴史学というものがいわゆる社会科学に解消するものか否か、甚だ疑問であります。先生の書物にはいわゆる分析はないかも知れない。しかしここには眞の歴史家のみがよくするところの叙述と指摘というものがあるのであります。そして大変おもしろい現象だと思つるのは、本書に対して殆ど絶讃という近い書評を書いたのは実は政治学者でした。今日、少くとも辛亥以前をあつた論文や著書で本書へのメンションの見られないものは、國の内外を問わず、余り多くあるまいと思われまふ。

そのほか先生の御仕事には、編著として中央公論社「世界の名著」の『孫文・毛沢東』や、毎日出版文化賞を受けられた平凡社『宮崎滔天全集』全五巻、また先生が指導せられた人文研の共同研究の報告たる『辛亥革命の研究』（筑摩書房）及び中国同盟会の機関誌『民報』の索引（人文研刊）などがありますが、詳しく申上げる余裕がございません。ただひとつ、先生の永年主宰せられた人文研の研究班が、関西における中国近代研究の中心として、多くの学者を養成する役割を果たした点のみを、指摘しておきたく存じます。（中略）

先生の御冥福を祈ります。